



OTONARI ARTIST
2021

この事業は、国内外からお寄せいただいた寄附金をもとに造成された「福島県東日本大震災子ども支援基金」により実施しています。



学校連携共同ワークショップ
おとなりアーティスト
2021

アートによる新生ふくしま交流事業 「アートで広げる子どもの未来プロジェクト」

アートによる新生ふくしま交流事業
「アートで広げる子どもの未来プロジェクト」

学校連携共同ワークショップ おとなりアーティスト 2021

学校連携共同ワークショップとは、美術作家を先生として招き、各学校等で子どもたちを対象としたワークショップを開催するプログラムです。作家が出向いて子どもたちと交流しながら、一緒に制作を楽しみ、いつもとは違う『作る喜び』を体験することができる活動になっています。

今年度のワークショップは、福島県ゆかりの作家（アーティスト 門馬美喜さん、画家 宮嶋結香さん）、当館学芸員が講師となり開催しました。

門馬 美喜ワークショップ

「建築廃材で小さなまちをつくろう」 ー木製ブックスタンド制作ー

「建築廃材で小さなまちをつくろう」というタイトルで、木製ブックスタンドをつくるワークショップです。

門馬さんのご実家が工務店を営んでいるため、門馬さんも福島県の復興を自身の目で見てきました。

ワークショップで使用する廃材は、ただの木材ではなく、福島の人々の生活を支えた証です。このことを踏まえると、子どもたちの創造活動に膨らみが生じます。

ひとつとして同じものがない木材をつかって、一人ひとりの創造性を大切に言葉かけをする門馬さんと共有した時間は意義のあるものでした。

ワークショップ会場

▶ 福島県立相馬高等学校



門馬 美喜 Miki Momma
画家・アーティスト

1981年福島県相馬市に生まれる。幼少の頃から伝統行事「相馬野馬追」の騎馬を身近に育つ。13歳から水墨画を始め、東京造形大学卒業後、中国に美術留学し帰国。展示する地域の歴史と関わる馬の歴史を実物大の大きさの馬で描いた水墨画作品や、東京と相馬市の日常の風景を描く「Routeシリーズ」を国内外で展開し続けている。



11/7(日) 福島県立相馬高等学校

12名参加

門馬さんのワークショップは、清々しく晴れた立冬の日に開催されました。美術室のテーブルに、大量の建築廃材の木片を広げると木の香りが漂い出しました。形も素材も多様な木片を手にとって眺めたり、組み合わせたりしながら自由に発想を広げていく生徒たち。木片をそのまま使ったり、のこぎりで切ったりしながら、思い思いの街をつくり上げました。仕上げに柿渋(平安時代からの塗料)や蜜蝋(みつろう)ワックスを使う

と、陰影や質感などが現れ、深みが増し、味わいのある作品になりました。生徒たちも「柿渋も蜜蝋も普段、滅多に使わないものですね」と興味津々。完成したブックスタンドを見ながら門馬さんは、「使った木片の数や密度の高さなどは、気にしないでいい」「考えに考えて、この角度で、この位置で、ここしかないと思ったことを大事にしてほしい」と生徒たちに話しました。



門馬 美喜 ワークショップ アンケート

自分が思うままに組み立てて世界を作っていくのは、難しくも楽しかったです。

これまで「きれいに仕上げる」「上手に見せたい」といった表面処理にこだわっていた傾向があったが、素材に直接手で触れ、発想を広げていくを通してモノづくりのシンプルな面白さに気付いたように思えた。
(教員)

他の人の作品は、一人ひとり個性があって「こんな発想があるのか」と思うようなものもたくさんあり、面白かったです。

自分の思い描く街を、廃材を使って作るの面白いなと思いました。

廃材を使った工作と聞いて、どうなんだろうと思いましたが、思ったより木材がしっかりしていて、釘を打つのがとても大変でした。

自分で自分の世界を作れるといった部分にとっても楽しさや喜びを感じることができた。

木だけという表現のやり方に悩まざるを得ない反面、うまく組み合わせさせた時の達成感を強く感じる事ができました。

自分の行きたい世界・町・場所を作る事なんて無かったのでとても新鮮でした。



作家からのメッセージ

門馬 美喜

私は2022年3月16日福島県沖を震源とする地震により被災したアトリエで執筆している。

停電は解決したものの、断水のため自衛隊から給水をいただいている。家を直す建築関係者の手は足りていない。降雪に備え、アトリエ内で割れた13枚の窓ガラスの破片を、粉塵を浴びながら強風の中一人で拾い集め、窓に板を打ち付けなければならない。

2011年以降、相馬市では大地震を3回、洪水を2回経験した。その都度住民は瓦礫を片付け、修理し、整備を続けてきた。

東日本大震災時、市内で壊れた建造物、汚染されているかの様な撮影をしていた報道関係者、アーティストは多数いた。直し続ける人の努力、除染されていた地は殆ど取り上げられない。特に現代アートの世界にとっては再生していく姿は地味で扱うに値しないのかもしれない。「被災地の人間はいつまでも汚染され、壊れた建物に囲まれ悲しんで暮らして欲しい、それを世界に発する事が真実だ」という風潮があった。

しかし、人間が自然災害から境界をつくり、自分たちの住みよい環境をつくり続けてきた行動こそが全てのものづくりの根源なのである。災害からの回復に着目せず、強烈な場面を常に求める風潮こそが、文化を縮小させていくのではないだろうか。

以前から私が県内外でワークショップを行う際に使用する素材は「福島県内で使われた建築の廃材木片」である。何十種類もの木片を直に手に取る事で、建物にはこういった木材が使われているかを知るとともに、人の手で建築物がつけられてきた実感を得ていただく。

ワークショップの完成目標は大まかに「まち」と伝えるが、テーマは自由だ。参加者は小さいサイズながら建造する立場に立ち、自分が望む場所とは何かという思いに向き合い、廃材の多様さから完成に向かう選択肢を広げ、立体的に可視化させていく。今後も若い世代が参加できる様に続けていきたい。

宮嶋 結香 ワークショップ

「古紙を使って絵を描いてみよう！」

「古紙を使って絵を描いてみよう！」というタイトルで、役目を終えた紙袋や包装紙、ポスターなどに絵を描くワークショップ。

紙を破いた断面のシワや入っている模様からイメージを膨らませて自由に描きます。紙の凹凸や色がマチエールとなって、作品の質を高めてくれます。

美術館のポスターは子どもたちの手によって作品となり再び美術館に貼り出されました。

新しさばかりを消費する人間のデザインや物に対する価値観を考えるきっかけになるワークショップでした。

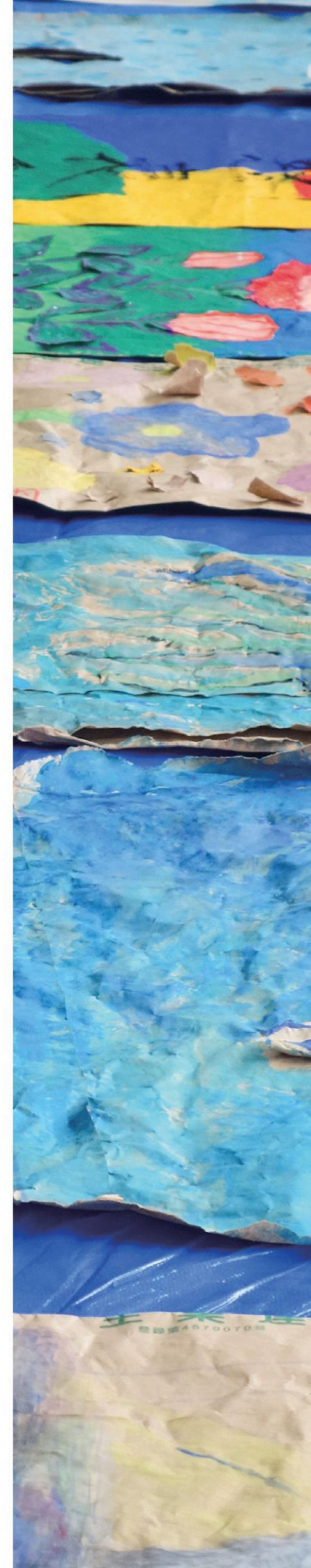
ワークショップ会場

- ▶ 田村市立大越小学校
- ▶ 田村市立要田小学校
- ▶ 南相馬市立太田小学校
- ▶ 二本松市立渋川小学校
- ▶ 須賀川市立小塩江中学校
- ▶ 郡山市立日和田中学校
- ▶ 会津坂下町立坂下中学校
- ▶ 会津若松市立第二中学校



宮嶋 結香 Yuuka Miyajima
画家

福島県出身。
2009年女子美術大学芸術学部美術学科版画コース卒業。
絵を描いたり、版画もやります。
紙は米袋などを使っています。
生きものや風景を主なモチーフに、
さまざまな記憶を辿るような絵を描きたいです。
リトルモンスターという小さな立体のワークショップも開催
しています。



11/17(水) 田村市立大越小学校

22名参加

紙袋や包装紙、チラシなどを使って絵を描くワークショップは、宮嶋さんのデモンストレーションから始まりました。紙は、手で破いて描きやすい大きさに。破れた断面やシワ、紙に入っている模様も意識してイメージを膨らませていく宮嶋さん。子どもたちは紙の形やシワをパッと見た時、どう見えるかなどのお話や宮嶋さんの技術にとても興味を持ちました。「紙にできたシワから絵を描き始めるなんて見方がすごいです」と、心をわしづかみにされていました。宮嶋さんから「自

由」を感じとった子どもたちは、すぐさま自分の作品づくりに没頭していきます。「ゴールを考えず思ったことだけを古紙に描く時間は、自分の発想さえも壊していくようで楽しかったです」「絵を描いている時に、どんなところが良いかなど話してくれたので、こんな工夫ができるかなと考えながらできました」と長時間集中して自由に、たっぴりと描きたい絵を描いた子どもたち。その表情は、達成感と満足感にあふれていました。



11/17(水) 田村市立要田小学校

16名参加

要田小学校は、田村市船引町と三春町の境に位置します。ワークショップには、5年生と6年生が参加しました。古紙を手で破った形やシワ、紙に印刷された模様、破れた断面も生かす宮嶋さんのデモンストレーションに、創作意欲をかきたてられた子どもたち。「失敗はない」「絵の具で遊ぶ」という宮嶋さんの言葉をきっかけに作品づくりをスタートさせると、時間が経つほどにそれぞれの個性と感性が輝き出しました。「あまり絵を描くのは好き

ではなかったけれど好きになりました」「いらないものを使って描くことができたので、家でもやってみようと思いました」「難しいかと思ったけれど描いているうちにできあがって、絵ってすごいなと思いました」などと、子どもたちは感想を述べてくれました。中には、ノリノリで作品を複数制作したり、立体的に仕上げたりする児童も現れ、教室の中は終始熱気で満ちていました。

11/18(木) 南相馬市立太田小学校

9名参加

南相馬市立太田小学校は、同市原町区の最南端にあります。大震災直後は、校舎で学習できない時期もあったそうです。しかし、ワークショップ当日は、そんなことを感じさせないくらい5年生も6年生もみんな元気。教室には、少人数ならではのアットホームな雰囲気が漂っていました。宮嶋さんの発想や手法は、児童はもちろんですが、一緒に参加し作品を制作された先生方にとって

も興味深いものだったとのこと。「米袋は、羅紗紙やクラフト紙とは違う味わいが出て描いて楽しかったです」「米袋にのびのびと大きく、そして黙々と描いていた児童は、凹凸のある表面に普段感じない色ののり方を楽しんでいたように見えました」「私自身も参加してみ、気持ちよく身体を動かして描くことができました」など、感想を寄せてくれました。



11/19(金) 二本松市立渋川小学校

12名参加

最初に宮嶋さんの作品を鑑賞しました。米袋に描かれた作品を見て「絵は、画用紙に描かなければならないもの」という固定観念を覆された子どもたち。用意した紙に大胆にあたりをつけて描き始める宮嶋さんの姿にもびっくり。「米袋を破って描いてもいいよ」「持ってきたチラシや紙袋をちぎって貼ってもいいよ」。次々に飛び出す想定外の言葉にも背中を押され、解放された子どもたちは、もうワクワクが止まりません。「米袋を限

界まで破っていくと、すごくでかくなりました」「絵を描いている時、『すごいね!』『いいね』とってもらえて、とてもうれしかったです」「作品名は『自然の中に消えた記憶』です。本当は記憶ではなく、自然にしたかったのですが、やっていくうちに記憶みたいだと思いました」など、周りの言葉を力に、考え抜き、イメージを形にした子どもたちの感想から見てとれるのは、いずれも深い喜びでした。

11/19(金) 須賀川市立小塩江中学校

16名参加

須賀川市の東側にある小塩江中学校のワークショップには、1年生から3年生まで16名が参加しました。講師の宮嶋さんは、デモンストレーションの後、生徒たちに「画用紙にはない質感を楽しんでほしい」「浮かんだイメージ、インスピレーションを大切に」「絵の具で楽しむように、遊びながら自由に組み立ててほしい」と話しました。当初、自由に発想することに戸惑う生徒もいましたが、古紙を見つめるうちに刺激され、みんなのめ

り込んでいきました。中には「小さい頃、何も考えずに描いた楽しさを思い出すことができた」という生徒も。特に人気があったのが米袋です。ちぎった米袋が都道府県の形に見えたという生徒は、中央に穴をあけて福島県にしていました。米袋を開いて本のようにしている生徒、ポスターを大小様々な形にちぎって貼ってスクラップブックのように仕上げた生徒もいました。



11/20(土) 郡山市立日和田中学校

7名参加

紙袋や米袋などに絵を描くのは初めて。普段は、白い紙に絵を描くことが多いという美術部の生徒たちに、宮嶋さんは「美術に失敗はありません」「それぞれの感性を大切に」と話しました。「普段捨ててしまう米袋を画用紙のように使うなんて楽しい」と、思い思いにイメージを膨らませ始めた生徒たち。丸くやわらかい雰囲気のある紙を手にした生徒は、ブルーのグラデーションを使って空をふんわりと表現。古紙をちぎったら猫の形に見えた

という生徒は、自宅で飼っている猫を描いていました。図鑑でキリンのページを開いていた生徒は、独創的な色づかいでキリンを描写。床に敷いたブルーシートにインスパイアされたという生徒は、「海の中にあるような作品になった」と話していました。完成した作品を一堂に並べてみると、それぞれに個性を放ちながら一つの豊かなハーモニーを奏でているようでした。

11/27(土) 会津坂下町立坂下中学校

19名参加

文化部の3年生にとっては最後の部活、卒業記念にもなるワークショップ。始める前に宮嶋さんは、「手で破いた紙の断面やシワ、印刷されている模様もそうですが、例えば雲の形、木の年輪みたいに見えるとか、紙の形からもインスピレーションを受けて何かを感じてほしい」「絵の具で遊んでほしい」など、作品づくりのポイントを伝えました。生徒の中には、共同制作をするグループも何組かいて、紙の形やクシャクシャ感、色、様々

なことを感じながら協力し合って大きな作品を作っていました。経験したことのない時間を過ごした生徒たちは、「ポスターのジャンプしている女の子を見て、『天使やん』と思ったので、羽をつけました。米袋のぼこぼこを使って犬の毛を再現しました」「米袋にいっぱい魚を描いて楽しかった」「袋のしわや形を使って、様々な表現が出せることも面白かったです」など、感想を寄せてくれました。



11/27(土) 会津若松市立第二中学校

12名参加

晩秋の会津は、午後から雪模様。教室に集まった生徒たちは、自然体でどんどん描いていく宮嶋さんのデモンストレーションに釘付け。「紙の形からインスピレーションを受けて」「米袋だと立体感や白色を生かして制作できます」と宮嶋さん。すぐに作品づくりに集中していく生徒たち。その様子を顧問の先生は、「材料集めを楽しんだ子、描きながらアイデアが広がっていった子、コラージュが楽しくなって材料の取捨選択に時間をかけた子、紙と絵の具の組み合わせをひたすら試し

ていた子、立体に組み立てようと作戦を練った子など、それぞれの子どもの発想のタネが芽を出していく過程が見えました」と振り返りました。生徒たちも「友達と破った紙を共有しながら作品を作ったのが楽しかった」「思っていた以上にイメージ通りにならず、どうしようと考えていたら、外に雪が降っていたので、去年もやった『白散らし』で雪を表現しました」など、自由に表現する時間を謳歌していました。

宮嶋 結香
ワークショップ
アンケート

米袋に描くという発想がなかったので、新しい発見が出来て楽しかったです。

どこに、どう貼ったり描いたりすると、カッコ良くなるのかを考えるのが難しかったです。

独創的な凄い絵が出来た。「芸術は何をしても、芸術」だった。しかも、楽しかった。

いつもは絵の具で風景や動物を描かないので、新鮮な気持ちになりました。

今までやったことのないちぎったり、丸めたり、描いたりたくさんの技法で作品を仕上げられました。

宮嶋さんに作り方を教えていただくうちに、どんどん作品を作りたいと思うようになりました。

普段、捨ててしまう米袋で画用紙のように絵の具で風景や動物などが描けると知って、やってみて楽しかったです。

友達と「これはどんなふうに見える？」など、意見交換しながら作ることが楽しかった。

紙をくしゃくしゃにし、自分が思うコラージュを作ったり短時間でとても楽しい活動が出来ました。これからの美術部でもこのようなアイデアを生かしていきたいです。

身近な材料たちを表現に取り入れる遊び心と、自分の表現の方法にぴったりくる材料探しが出来たことは、今後の子どもたちの制作に大いにプラスになっていくことと思います。(教員)

自由が苦手な子どもにとっても、表現に向かう抵抗感を払拭する機会になったようです。(教員)

紙を丸めたり、広げたり、破ったりとその中で見えてくるものを作品にすることは、子どもたちの発想を最大限に引き出すのに、とても有効だと感じました。(教員)

絵を描くときに、どんな作品を作ればいいのか考えてしまう事が多かったが、今回は自由に切り、見えたものを感じるままに制作できて良かった。

出来上がった作品を見ながら、それぞれのカッコよさや面白さを話し合っていた姿が印象的でした。(教員)

コラージュのやり方や、絵の描き方、とても詳しく知れました。

「米袋」に絵を描くということ自体が、ワクワクすることでした。(教員)

自由に描けるのが楽しくて、いっぱい作品を作れました。

人によって見方が違って面白かったです。

宮嶋 結香
ワークショップ
アンケート

美術は難しいと思っていたけれど、今回の授業のおかげで楽しさを知ることが出来た。

袋のしわや形を使って、様々な表現が出せることが面白かったです。

画家さんとの交流が貴重な時間であり、言葉では子どもたちに教えることができない感じ方・発想・アイデア・感性などを体験できた。(教員)

紙を破ったり貼ったりして、幼稚園にもどったみたいでした。

米袋に絵を描くのは、あまりない事なので、何を描くか考えて好きなように描けて楽しかった。

子どもたちが休むことなく絵に没頭する姿に驚いた。(教員)

作り始めて袋を限界まで破っていくと、すごく大きくなりました。下の方に街を作ったり、上の方には宇宙を作ったりしました。

米を入れる袋を使って、いろんな絵を描くことが凄かったです。

古紙で絵を描くのはとても楽しいし、紙の無駄にもならないので良かったです。

大人が考え付かない子どもたちの自由で大胆で面白い発想力や想像力にとっても驚かされました。(教員)

米袋のくしゃくしゃ感が、木の幹らしく見えて、こんな絵の描き方もあるのだなと思った。

最初はできるかな？と不安だったけれど、始めるととても楽しかったです。

普段このような形で絵を描くことが全くないので、とても楽しかったです。

凹凸のある表面に普段感じない色ののり方を楽しんでいました。(教員)

小さい頃、何も考えずに描いた楽しさを思い出すことが出来た。

様々な考え方があることを知り、視野を広げることができました。

「絵は画用紙に描かなければならないもの。」という子供たちの気持ちが崩れたように思います。(教員)

「玄米を入れる袋を用意しました。」と言われてびっくりしました。

福島県立美術館 学芸員 ワークショップ

「目や鼻や口を描かないで 友達の顔を描いてみよう」

テーマは、

「目や鼻や口を描かないで友達の顔を描いてみよう」です。

友達の雰囲気や友達から教えてもらった

好きな音や物などから想像し、

いろいろな画材を使って描きました。

ワークショップ会場

▶ 福島市教育委員会教育研修課
(ふれあい教室)

作家からのメッセージ

宮嶋 結香

今回のワークショップは描くテーマをあえて設けずに、私が普段制作を行う時にも使用している古紙を使って自由に絵を描いてもらおうと思いました。

「自由に絵を描く」ということは意外にもとても難しいことですが、破いた紙の形はなにに見えるか？紙の皺や折り目、包装紙やポスターの模様からイメージをたどっていくと自分の中にどんなイメージが生まれてくるか？など、古紙を使うことで画用紙や、キャンバスに描く時より肩の力を抜いた、自由な発想で作品を描いてみてもらいたいと思いました。

支持体からのイメージを楽しむということは、まさに普段の制作で私が楽しんでいることで、子どもたちにもこの楽しさを伝えられるか最初は不安もありましたが、どんどん出来上がっていく作品を見て、私もとても刺激を受けました。

生徒さんからの感想の中に、「幼い頃に返ったように絵を描くことを楽しめた」というものがあり、まさにそのように描くことを楽しんでもらいたいと思っていましたので、とても嬉しかったです。そして身近にあるものや、意外なところから自分の中に新しいイメージを生み出すことは可能なんだ、という感覚を感じてもらえていたら嬉しいです。

今回たくさんの生徒さんの作品が生まれる現場に立ち会えて、自分も気づいていなかった古紙の可能性をあらためて発見できる機会にもなり、大変楽しいワークショップをさせていただきました。このような機会をいただき、本当にありがとうございました。



10/5(火)

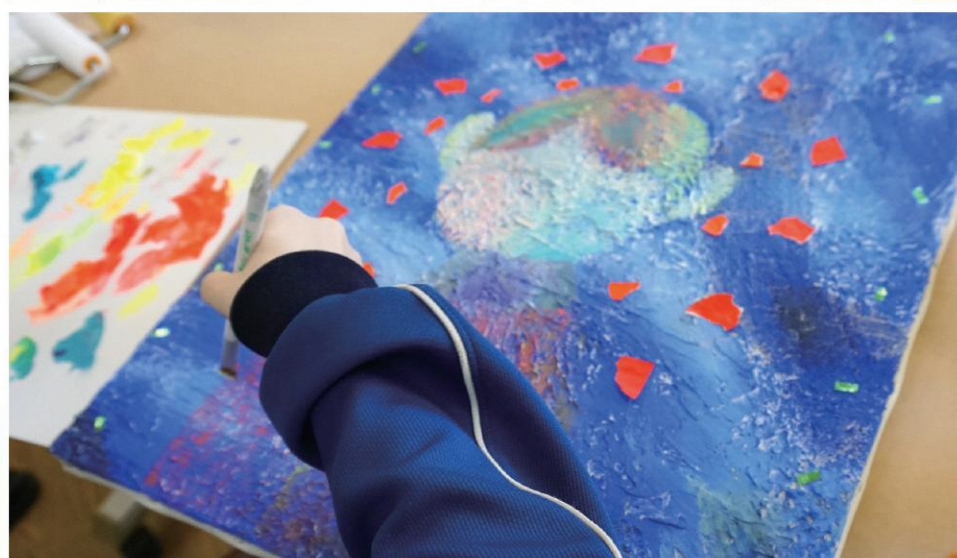
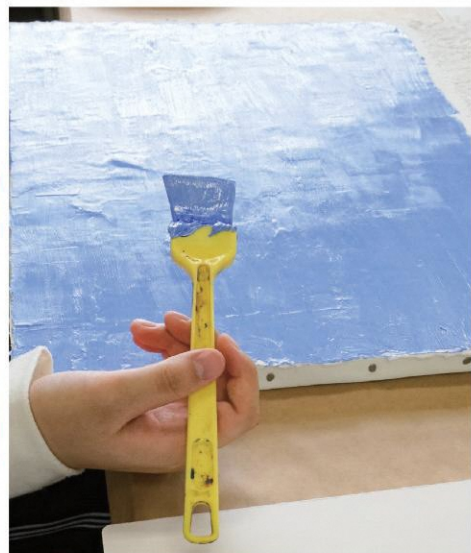
10/7(木)

10/26(火)

福島市教育委員会教育研修課 (ふれあい教室)

全3回で作品を完成させるプログラムは、南相馬市出身の画家、坂内直美さんの作品鑑賞からスタートしました。続いて自身が描こうと思っている友達の好きなものをヒアリングシートに書き、それらを音、色で表現するとどうなるかも書きました。準備が整ったところでいよいよ作品づくりです。子どもたちは、マチエール(絵肌)作りからこだわりをみせ、作業に没頭していました。五感を使って友達から感じ取ったことを画面上で表現

し、目や鼻はないけれど友達が持っている空気が伝わる作品をつくりました。紙や折り紙を貼ったり、ビーズを付けてみたりと、リズムカルな作品に仕上がりました。改めて子どもたちの作品を見ると、絵になった友達が何かを語りかけているような不思議な感覚に包まれます。いつもそばにいてくれる友達の声もそうですが、絵を描いた子どもの声にも耳を澄ましたくなります。



作品展

2022.0208~0227

福島県立美術館
企画展示室B

2022年2月8日(火)~2月27日(日)

- ▷ 門馬美喜ワークショップ
- ▷ 宮嶋結香ワークショップ
- ▷ 美術館学芸員ワークショップ

「建築廃材で小さなまちをつくろう」

木製ブックスタンド制作 | 門馬美喜ワークショップ



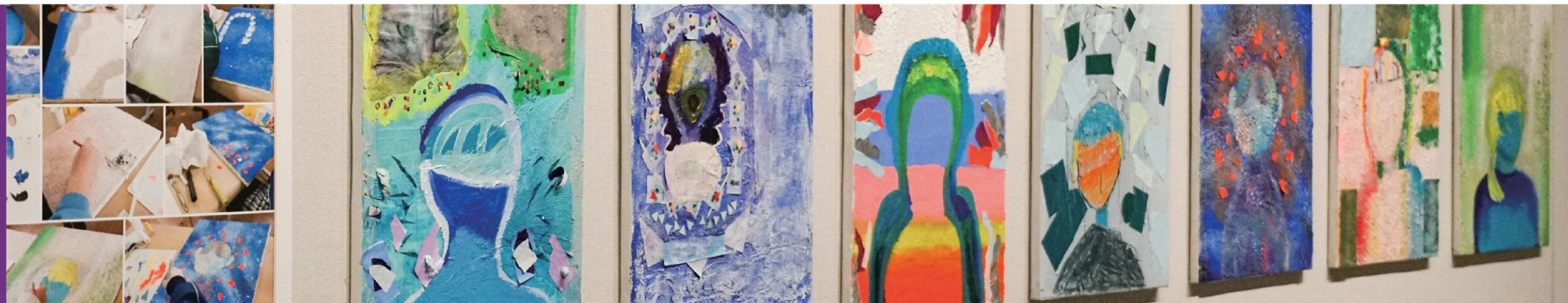
「古紙を使って絵を描いてみよう!」

宮嶋結香ワークショップ



「目や鼻や口を描かないで 友達の顔を 描いてみよう」

美術館学芸員ワークショップ





作品展会場アンケート

- 賑やかな音楽が流れているようなお部屋のイメージ、楽しい!!
- かんのやの紙袋の中に絵があり、覗いて見れて楽しかった!!
- 子どもたちの元気いっぱいな作品が見れて楽しかったです。
- 独創的で興味深い作品で楽しかった。
- 児童や生徒たちの自由な、楽しそうなアウトプットとその隙間から覗く現代の子どもたちの鬱屈(うっくつ)した感情が見える所が良かった。
- 自由な色にあふれて力・パワーを感じました。
- 自由な発想で描かれた作品。伸びやかな感性、素晴らしい。
- 面白いです。使用されたポスターを再利用していて珍しい。
- 子どもたちの、自由な想いが随所に見られる。もっと自由に、創造的に力強くあって欲しいと思う。
- 廃材や古紙に着目したワークショップは面白い。
- 子どもたちの創造力に凄く圧倒され、感動しました。一人ひとりが様々な事を考え、創り出していることをひしひしと感じ、将来がとても明るいのだと実感しました。
- 子どもたちの感性の豊かさを実感しました。一人ひとりの良さが光っている作品でした。
- 自由にのびのびと描いていて、見ていて気持ちがいいです。
- テーマ設定が斬新ですごい!と思いました。



アートによる新生ふくしま交流事業

芸術という視点から元気な浜通りの復活と絆、誇り、生き甲斐を取り戻す取組を全県的に行うとともに、子ども達が学校では体験できない創作活動に参加する機会を通し創造性や感性など心豊かに成長してもらうために、「アートで広げるみんなの元気プロジェクト」及び「アートで広げる子どもの未来プロジェクト」を実施します。

アートで広げる子どもの未来プロジェクト

福島を担う子ども達に、将来「新生ふくしま」を推進する人材として活躍してもらうため、多彩なアートプログラムを実施することで、心豊かな成長を支援します。

アートによる新生ふくしま交流事業「アートで広げる子どもの未来プロジェクト」
学校連携共同ワークショップ「おとなりアーティスト 2021」

制作・編集 福島県立美術館、認定特定非営利活動法人ドリームサポート福島
写真 大北 孝、内野 由美子
デザイン 有限会社デザインングマーブル

主催 福島県
事業受託者 認定特定非営利活動法人ドリームサポート福島

【お問合せ】
認定特定非営利活動法人ドリームサポート福島
福島県福島市三河北町2-8Coco Mezon1階B室
TEL 024-563-1955 FAX 024-563-1955 E-mail info@f-jdi.com